

[設立総会 特別講演]

情報と倫理—21 世紀の倫理—

設立総会の特別講演として、今道友信先生に「情報と倫理—21 世紀の倫理—」をお願いした。今日、生命倫理、美の倫理、環境倫理、或いは技術倫理など、すべての分野で倫理が問い直されている。先生は、エコエティカ (eco-ethica) という新しい倫理概念を提唱されている。Eco とは、エコロジーも意味するが、ここでは狭義には「家」、広義には、生息圏、行動範囲をいう。人間の場合、それは地球を超えて宇宙空間やサテライトに広がるとともに、人体内の nano-space、遺伝子の領域にも及ぶ。人類のあるべき環境を、人類の生息圏規模で考える倫理について研究を進めている。高度技術社会、あるいは高度情報社会の中で人間の生き方を考え直そうとする新しい哲学の提唱と解釈する。

情報システム学から見ても、生圏規模の社会における倫理問題は強い関心事であり、先生の提唱されるエコエティカは、今後の研究にとって大きな指針になるのではないかと考えられる。

情報と倫理 —21 世紀の課題—

今道 友信 氏

それでは、ただいまから、さっそく、「情報と倫理」という題でお話し申し上げます。「21 世紀の倫理」と承っておりましたが、昨夜、「21 世紀の課題」と副題だけ変えましたので、ご了承ください。

最初に、いただいている時間が 50 分ということで、項目を整理しましたら、A から Z まで 26 ございます。一つ 2 分ずつやっても超えますので、非常に大急ぎで致します。

先ほど、北城会長からのお話の中で、会長のところには、時々お叱りの手紙も来るということとございます。叱られるということは、存在を認められているということで、まだまだお喜びになってよろしいのではないかと思います。

哲学とか倫理とかいうものは、私は大事なものだと思っているのでございますが、私の方に

はどなたからもお叱りの言葉さえなく、全く無視されております。にもかかわらず、今回こちらでは、こういう大事な設立総会にお招きいただきまして、本当に私は感動しております。お礼のつもりで一生懸命いたします。

まず、話は三つに分かれておりますが、1 と 2 を 10 分ずつで済ませて、3 の「情報と倫理」というところを 30 分くらいというつもりでお話しいたします。

まず、「倫理の必要性」というところからお話ししたいと思います。その前に、日本語では倫理と倫理学の二つがありますが、英語の ethics というのは、ethics だけのように、これは学問でございます。倫理学ということでございます。

それに比べて、道徳 (morals) は、学問ではありません。学問がなくても立派に道徳的に生きる方がおられますので、道徳家という言葉がございます。行為行動の立派な方で、そのお考えの中に倫理的な知識がなくても、おのずか

Tomonobu Imamichi

英知大学大学院人文科学研究科

[設立総会 特別講演]

© 情報システム学会

ら立派な心構えの方を道德家と申します。ですから、道德は、本当に三つ四つ、五つ六つぐらいの子どもから仕込んでいかなければならないものでもあろうかと思えます。

私どもは、別に医学を直接勉強したことがなくても、平熱、脈拍、血圧の正常値や栄養のバランスの取り方など、医学の知識を多少は持っておりますので、身体健康管理はできるのですが、人間の行為についての学問、倫理学についても、医学の常識ぐらいの知識を、この世に生きる者として持っていただきたいということが、今日のお話の内容の一つでございます。

それで、倫理学は、どういう学問なのか、これは哲学の一環でございます。ですから、倫理学を話すためには、哲学とは何かということを簡単にお話ししなければなりません。

それでは、哲学 (philosophia) とは何かということですが、最も基礎的な定義を古代ギリシアのソクラテースという人が与えてくれました。この人は、哲学の始祖と言われるぐらい偉大な人で、思想の自由のために死刑になった人でございます。このソクラテースは、人生の指針を定める知識を求める学問を、自分で *philosophia* と命名しました。

この名前の由来を語っておりますと1~2分で済みませんので、そうではなくて、ソクラテースが一般の方に、哲学の一番わかりやすい基礎的な定義を言うならば、それは *epimeleia tes psyches*, すなわち、「魂の世話」だと言いました。「魂」という言葉がお嫌いなら、「精神の世話」ということです。他人に世話してもらうのではなくて、自分でする「魂の世話」。

「魂の世話」というのは何かというと、肉体の世話と対比して考えてみればよろしいです。肉体の世話は、皆様を含めてすべての人が、意識するとしないとに関わらず必ずしているのです。朝食、昼食、夕食と一日に三食摂るということは、意識するしないは別として、栄養を補給していることです。頭が痛いと熱を測るのは、この病気の程度を知るためですし、入浴するのは清潔を保つためですし、ゴルフをなさったり、散歩なさったりなさるのも、これらすべては肉

体の世話のためです。

そうしますと、すべての人は、意識するしないは別として、肉体の世話は毎日しているのです。「ところで、精神の世話をなさっているか」とソクラテースに問われたら、どうなるでしょう。「いえいえ、私はどうもそういうことはしておりません。」とこう言わざるを得ない方が多いと思うのです。意識するとしないとに関わらず、肉体の世話はしているにも関わらず、精神の世話を本当にしているのだろうか、ということ。これも肉体の世話と同じく毎日しなくてはならないことでしょう。

肉体の世話のためには、いくつかの条件を、医学的な常識として知っていなければなりません。皆様の中の大部分は医学を勉強なさったことはございませんでしょう。私など全然勉強したことはございません。食欲や便秘の有無、平熱や血圧や脈拍の正常値がどのくらいかということを知っていて、身体の具合が悪いときには、その数値に合うか合わないかということでお医者様に行くか行かないかということを決めるぐらいでございましょう。

私も 60 歳ぐらいから、家で血圧計というものを買いまして、正常値が出るまで測ってみます。でも、これも大事なことで、正常値がいくらかということをお体知っているのです。ですから、それを大幅に越すと、これではまずいと、医者に行ったり、食べ物を加減したり、いろいろ工夫します。魂の世話をするためにも、倫理学のごく初歩的な常識、哲学の常識がなければなりません。

それで、魂の世話のための一般的条件は何であるか。公共的に大事な徳目が四つあります。それは何でしょうか。皆さまが先に読み取られたら私の話を聞かなくなると思ひまして、空白にしておきました。この E のところをご覧ください。それらは、それぞれ何であるか。枢要徳といひます。ラテン語で上に書いておきまして、下に、漢字を不完全に書いておきました。これだけ書いておいて、何とか見当がおつきになればよろしいのですが、「何じゃ、これは」というような状態では、魂の世話をする資格がないと

いってもいいのです。

それで、これを申しますと、第一は「正義」。第二は「賢慮」です。賢く慮るという「賢慮」。三番目は「勇氣」です。「勇氣」。四番目は「節制」です。「節制」。だいたい、そういえば知っているということになります。問題は、どの程度知っているかということです。

私の友人に何人もの政治家がおります。私は、高等学校は文科に入りましたので、大学では法学部に進み政治家になる人々がいたからです。政治家は、「社会政治を実現するために立候補しました」とか言いますが、当選すれば、同級生が集まってお祝いしますので、そういう時に、「随分、正義、正義と言っていたけれども、君の考えでは、正義とは何ですか。」と聞きますと、「君は高校生の頃からソークラテースのようなことしている。いまだにそんなことを論じているから、金も儲からないで、惨めな格好をしているのではないか。正義は、正しいことに決まっている」と言いますから、「では、正しいことを実現するというのは、どういうことを実現するのか」と問うと、「正義を実現するのだ」と応えるのです。これでは、まるで、犬が自分の尻尾をぐるぐる追い廻しているような返事です。「正義」、「賢慮」、「勇氣」、「節制」について定義しなければ、何も分からずに語っていることになります。正義のような哲学の基本について、医学の常識で脈拍とは何で、正常値はいくらかということをおぼえてくるくらいの知識はもつべきでしょう。

それでは、「正義」の定義は何か。最も基礎的な定義は、「正義とは、物資が公平に分配されていること」です。これは、アリストテレスが大昔にその倫理学の著書で言っています。考え進めると難しい正義が出てきますけれども、一番最初は配分の正義で、「物資が公平に分配されていること」。これは平等にではなくて、公平にということの方が大事なのです。3歳児にも20歳の青年にも食糧としての米を平等に同じ量を分配するのは誤りです。2, 3歳の幼児には少なめに、母乳を出す母親、伸び盛りの青少年には多く割り当てるのが大事でしょう。80を越した私のような者は、どんなに大食漢だとして

も、割り当てるなら青少年の半分位でよからう、というような、公平な分配こそが正義の徳です。

では、二番目の「賢慮」とは何か。それは簡単に言えば「中庸を守る」ということでしょうか。労働条件を苛酷にすれば、働き手は睡眠が足りずに事故を起こすし、逆にずさんに放任しても技術は上達せず、事故は起きるでしょう。

「勇氣」というのは何か。これは、戦争で敵に後ろを向けないことだと簡単にいう人びとが多いのですが、それなら戦争に行かない人は勇氣がいらぬのかということになります。「勇氣」とは、これは大事なことです。「自ら是と信じたことをためらわずに発言すること」、これが本当の勇氣です。

そして、「節制」というのは、申し上げるまでもないと思いますが、節度を尊重することです。お酒でもあまり飲みすぎたはいけません。いくら甘い物が好きでもそれを食べ過ぎてはいけません。ということが「節制」ということです。

こういう定義を簡単に調べて何の意味があるのか、お分かりになりますか。人類の現代的惨劇と、この四つの公共的枢要徳の尊重とは、関係があることを、今まじめに考えてみましょう。

まず第一に、今世界で餓死に瀕している人は非常に多い。そして、学者たちの言うことによりますと、20世紀から21世紀のこの4年半にかけての104年間の餓死者、および餓死線上をさまよっている人の数は、今までのどの世紀よりも多いといえます。

それに対して、もちろん人口が50億以上になったのだから当然だという考え方もあるのですが、それを当然だと言いながら、賞味期限を過ぎたものは処分する一方で、一食に20万円もの大金を払う人もいます。他方で、おずおずと片手を出して、ほんのわずかなパン一切れでも欲しがっている子どもの写真をテレビジョンなどで見かけますと、これは物資が公平に分配されてはいない世界だといわなければなりません。食料増産が可能になっていて、効率のよいトランスポーターが可能なシステムの中で

そういうことが行われているということを考えますと、今の社会は、本当に真面目に、人々が正義ということを考えたことのない、非倫理的な集団ではないかと言わざるを得ません。

交通事故者というのは、1898年、今から100数年前、ロンドンでたった二人の自動車事故者が出たときに、将来、日常の交通道具となるかもしれない自動車事故で死者が二人出たといって全市民はショックを受けていたのです。それが今では、年間、日本だけでも交通事故死は車によるものが2万数千件です。それは、たぶん過酷な労働条件を課して、トラックの運転手に睡眠が足りないようにしているかもしれない。あるいは、運転する自分がスピードを出しすぎたり、遅すぎたりしていることもあるかもしれません。ですから、いろいろな意味において中庸、すなわち賢慮が欠けていることが事故多発の一因だろう。そう思えば、賢慮という徳はたしかに重要です。

三番目の死者は戦死者です。これは皆様もお聞きになったことがおありかと存じますが、有史以来19世紀末までの戦死者の数と、20世紀100年と21世紀数年の戦死者の数といずれが多いかという、有史以来19世紀末までの戦死者のほうが少ないということは、すべての歴史家が一致して推定していることなのです。正式な統計はもう取れない遠い時代が含まれますから、統計を示すことができません。ここでも、20世紀あるいは21世紀は人口が多いのだからしかたがない、というようなことは逃げ言葉に過ぎません。なぜかという、戦死者の質が違ってきております。

かつて、戦死者は、自分が望むか望まないかは別として、戦う覚悟をして戦場に出た人でした。そして、武士たる者、あるいは将兵たる者は女子どもには一切手をかけてはいけないという最低のいましめがありました。それこそ戦う者の徳目でした。

今の戦争はどうなっているか。それは都市を破壊する。原子爆弾のことを考えればよくわかりますが、あまり、原子爆弾のことばかり言えないのです。最初の都市爆撃は、日本軍が重慶を空襲したとき、無差別爆撃を実行したのが世

界最初の愚挙の一つです。でも、その前に、都市を大砲で攻撃することは第一次大戦のときもございました。とにかく、20世紀になってからの戦死者は、都市居住者であれば誰でも、生まれたばかりの嬰兒も病床の老若も、女性も老若男女を問わず、みな殺戮の対象なのです。それをすべて戦死といわないのかもしれませんが、戦争で死んだことは確かですから、それは戦死者です。

公害死。公害死というのは、公害で死ぬ人です。これらがまたどの世紀に比べても20世紀に最も多かったし、21世紀にもこのままでは、その徹を踏むだろうと言われていきます。

これらの四つの悲惨な死者を、今の四つの公共枢要徳と比べてください。物資が公平に分配されていれば、一生懸命に努力すれば今よりは餓死者は減ることは確かです。第二に、本当に労働条件をあまり過酷にもしない。あまり甘やかすこともしないで、自分もスピードを出しすぎてはいけないというように中庸を守れば、交通事故死も今よりは減るだろう。

第三に、勇気ということについて考えてみましょう。私は大東亜戦争の頃、旧制高等学校から大学に行っていた頃でございました。その頃、私の周囲で第二次大戦を聖戦などと本気で言っていた先生もいなければ仲間もいませんでした。そして、陰で集まっては、「東条をぶっ殺すことができればなあ」などというようなことを言っていたり、「天皇陛下もいくつになつたんだ。そろそろ決断を下してもいいのじゃないか」などということ陰では言っていたのですけれども、誰ひとり勇気を持って公に発言しなかった。いたにしても。極めて少なかった。だから、本当に人びともう少し勇気があったならば、戦争は少なくとももっと早い時期に終結していたかもしれません。それから、戦争など起こさずに済んだということもあったかもしれません。今のアメリカを見ても、ブッシュのやり方に反対を公言するために勇気を必要とする人はたくさんいるのでしょ。

節制。これは、足尾銅山の事件などがありましたから、明治時代から公害はあったにせよ、

しかし、20世紀ほど廃液垂れ流して海の色までが違ってくるほど、いろいろなことはなかったもので、20世紀の時代に公害死が一番多くなっています。

そうしますと、世間が倫理、倫理とって、何か意味がないように思っておられる方もあるかもしれませんが、本当に世界中の人が今より少し倫理的になるならば、そして倫理を大事にするならば、悲惨な惨劇の数が少しは減るだろうと思います。少しは減るだけでも、放置しておくよりはよほどいいと思わなければなりません。

それなのに、悲しいことには、倫理学というのは、今、大学で最も人気のない科目なのです。倫理学は今ほとんどの大学で必修科目の中に入っておりません。選択必修の中に、倫理学が並べられています。しかも、それは文学部だけであって、法学部には上のような選択肢がないところがございます。そして、医師はじめ、科学専攻の人の中にも、職業柄人びとと交わることが多い人もいるのですけれども、そういう学科でも正式の倫理学が選択必修になっているところが非常に少ない。それで、選択必修になっていても、他に取りたいような選択必修、社会思想史、西洋文化史、日本思想史、そういうものが自分の専門科目と重なっていなければいけないけれど、みな重なり、ただ倫理しか空いていないというような時にしか来ないのです。したがって、倫理学に来る学生の多くは活気が少なく、先生の方も、熱をこめて講義しても始まらないような感じをもっている。これは非常に残念なことです。

皆さま、試してごらんになるとよろしいのですが、日本で倫理学を教えている人に、「四大枢要徳というのは何か知っているか」とお聞きになると、「知らん。わしはカントをやっておる」とか、「僕はサルトルをしている」というような答えをする人さえいるのです。いばる前に古典的倫理学を知らないことを恥じなければいけないのに、大体知らないですましている人が多いのです。そういう人に習っていますから、ますますおかしくなるのです。ですから、もうこれ

で、教員の側にも、伝統的倫理学の復習的習得さえ必要だと言わなければなりません。

それでは伝統的倫理学さえ習得すればいいのでしょうか。伝統的倫理学は環境が自然のときにできたもので、今はそうではございません。環境倫理学者は、環境といたら自然界のこととお考えになる方が多いのですが、環境とは我々の生活環境のことですから、自然だけではありません。例えば、こういうところで、東京の大都会の真ん中で講演会が催されるということは、われわれが音を遮断する建築装置のある物の中にいるからできるのであり、しかも老人私の声でも隅々まで届くということは、マイクロフォンがあるからです。

そして、皆様がここまでいらっしゃる過程の中で、土をお踏みになった方がいらっしゃるか。ほとんどの方は、土をお踏みにならなかったでしょう。ですから、自然の土はアスファルトで覆われていて、われわれは土や草からは遮断された処を歩いてきたのです。たしかに、太陽や空気はございますし、風もございますが、半分は科学技術的に構築された技術連関という空間の中を通ってきている。そして、私どもの営みは、そのような技術工学的に設計された環境のもとで行われているのですから、今の我々の環境は、自然と同時に、科学技術的空間、私はそれをテクノロジカル・コヒージョン (technological cohesion) とか、テクノロジカル・コンジャンクチュール (technological conjuncture) という外国語で命名しておりますが、この技術連関と技術連関がわれわれの環境として肝要になっていることを忘れてはなりません。

そうしますと、そういう新しい環境の中で、新しい徳がどうしても必要になってきますでしょう。

例えば、punctuality という態度があります。そういう性格で几帳面なことは小者のすることと言われていました。私は、助手の時代を覚えています。「哲学会は、土曜日正午後2時に開会」というように、「正」という字を書いておかないと、偉い先生は2時10分過ぎぐらいにいらっ

しゃる。もっと偉いと思いたい人は2時半頃にいらっしゃる。だから、結局、会は2時半から始まるようになる。これは日本だけではございません。ラテン語で「シネ (sine)」というのが英語の「without」ですが、ヨーロッパでは正2時開始なら、「シネ・テンポレ (2h. sine tempore)」といいますと、「14時に余裕の時間なしで」ということで、結局正2時です。そして、それを略語ではstと書きます。「余裕の時間あり」というのは、「クム・テンポレ (cum tempore)」というのはctと書きまして、15分余裕があると。会議が6h. st といったら6時にちゃんと始まるのです。6h. ct と言ったら、6時15分になります。1960年くらいまでは、みんなそう書いていたのです。今はもう、stという記号はあまり使いません。日本語でも「正6時」などという言葉は誰も使わなくなりました。つまり、時間を守らないと、大勢の方が終バスや、終電車に間に合わなかったりしたら、大変迷惑ですから、そうせざるを得なくなるのです。

昔、小者がパンクチュアルであったなどという時代は過ぎて、今は部下を思う大物こそ時をきちんと守ってやらないと、下の者が困ることになります。Punctuality は、時間だけではなくて、例えばボタンを正確に押すことも意味します。機械的な技術連関の中では、ボタンを正確に押さない大変なことになります。私は、ある時、駆け込んでしようとしたおばあさんを私の乗っていたエレベーターに乗せようとして、親切にボタンを押したら、間違えて閉まるほうのボタンを押してしまって、おばあさんはうらめしそうな顔をしました。私は「すみません」と言ったのですが、扉は閉まり、機体は動いてしまいました。

それは致命的事件ではありませんでしたが、もしも気付かずに、その老婦人が一瞬遅れていたら、倒れて頭を打ったりして、取り返しのつかないこともあるでしょう。ですから、今は、アクセルとブレーキを間違えては大変です。したがって、飛行機のテロリズムがあまり盛んでない頃、慣れた飛行機に乗りますと、操縦室を見せてくれたものです。それを見たとき、気が遠くなるほどボタンの数が多く、どれか一つを

押し間違えたら大変なことになるのだと思うと、本当に機械を操作することの徳 *machinastics* を新しい徳目としなければなりません。

そういうことを考えてみますと、私どもは、今生きているテクニカルな世界に本当に妥当する倫理学を立てていかないと、古い倫理学は忘れられていくのだらう。だから、倫理学を忘れた人達を軽蔑したり、悪口を言ったりする倫理学者は間違っているのです、私どもはお互いに協力して生きているこの世界を汚さずに協力して新しい勉強を試みなくてはなりません。それをeco (生圏) と申します。Eco はグローバルを超えます。なぜかという、私どもの身体の外の大きな宇宙の広がりや考えるとともに、またわれわれの身体の中の小さな世界、ナノ (nano) ・スペースとかフェムト (femto) ・スペースにまで人間の行為の結果は及ぶのです。

エコ空間の上のほうはインターシデリアル (intersidereal) という言葉がありますが、星際間。星の縁の空間に及んでおります。簡単に言えば、フロンガスを多用すれば成層圏に穴があくということも、インターシデリアルの世界とわれわれの生圏との関わりです。ですから、グローバルを超えて、全人間の生圏に関わる生圏倫理学というものをつくろうと思っております。

人の体を鍛える学術を体操と呼ぶのと同じように、機械を上手に操作するための学術を外国語では *machinastics* と私は命名したのです。機械を一つ操作することを覚えることは、体操と同じように、今、この機械の世界の中では大事です。ですから、コンピュータを覚えるなり、あるいは自動車を運転するなり、何でもいいですから、機械を一つマスターすることは、絶対に必要な徳ではないかと思えます。技術連関の中では、こういう徳がいつか危急の際に人を救うことにもなります。

ここは、そういう意味で、新しい徳目も出てきておりまして、eco-ethica というものを私も研究しておりますが、今、一昨年開かれました世界哲学大会、5年に一度開かれる世界哲学大会では、私どもの主張しましたeco-ethica は、最も大きな注目を呼び、三つのスペシャルセッ

ションが設けられて、大きな課題の一つになりました。これは、ナショナリスティックなことを言う必要はないのですけれども、日本で、人文科学の中で、世界的にこんなに大事にされている学問はございませんので、どんなにこの eco-ethica というものが、世界中で今求められているものかということがおわかりになると思います。

そうしますと、あたかもこれに対立するかのよう、今は、いろいろところで倫理、倫理と言っているのだから、何も eco-ethica などと言わなくてもよろしいのではないかという人々がおります。しかし、それらはみな応用倫理なのです。ですから、何が善であり何が悪であるかという基本のところからは考えないのです。ただ、失敗したときの言い訳になる accountability の情報を作ろうとする思想が多い。それは、倫理ではなくてサービス規程にすぎないところが多いのです。

皆様のグループの中にも、倫理意識がしっかりしていて、職業倫理が文章化されていると誇らかにお考えのところも多いかと存じます。けれども、その多くはサービス規程にすぎないのではないかと。本当に倫理学を勉強した人の意見を、少しでも取り入れて、基本から考えてできているのかと真剣に問い直さなくてはなりません。何も私ども倫理学者をやとって金を払えなどということを行っているのではないのです。そうではなくて、基本的な倫理意識を持った人びとが本当に考えて作ったものなのかどうかという内部反省は必要です。

さて、古い倫理も必要だけれども、それだけでは足りないものがあるから、新しい倫理が得られ、倫理一般がばかにされているのだ、ということの説明してきました。でも、古い倫理を無視していた結果どうなったかということ、さっき言いましたように、大変に不幸な死者が大量に出ていて、それに対して誰も倫理的責任を問うていないという処まで話してきました。

だから、古い倫理も必要なのですが、しかし、新しい倫理は、少なくともその新しい倫理を象徴するような新しい徳目でもあるか、という問

いも出しました。そして、さっき言いましたように、「正確性」、それから、「機操 (machinastics)」、「体操 (gymnastics)」ではなくて機械をひとつはマスターすることです。また、フィロクセイニア (philoxenia) といって、「異邦人に対する愛」も必要です。これは、やはり大事なものです。200年ぐらい前でしたら、横浜の生麦事件などという事件は、ただ外国人が日本人と様子が違うというだけで殺されていたわけですから、そういう非人間的感覚ではなくて、たとえ考えが違う者でも受け入れるということ、20世紀後半で達成されたといってもよいでしょう。ですから、イデオロギー的に寛大な精神で人を受け入れるようにしなくてはならないという、問題がございます。それから、あとで時間があつたら申し上げますけれども、「安全」とか「危機管理」というものが、徳目として考えられなければならないということも、大事なことでございます。

そして、3の情報倫理と書いてある情報というところをご覧下さい。私は、司会者の杉野先生がもしか黙っていてくださるかと思いましたが、やはり正確に1922年生まれということを知ってしまいましたので、82歳ということがばれていますので、この年齢を言い訳に使いたいのですが、新しい機械は使えません。ですから、私自身は新しい情報機械の何もわからない人間です。ただ、情報社会の中で生きておりますので、そこで若い人々からいろいろ聞いたり、それから、自分が経験したりしながら、情報社会という中で倫理がどういう問題を持っているか、そして、情報システムにかかわる方々が、どういうことをお考えにならないかということを考えて、あまり情報のことを何も知らない男ですが、情報倫理についてたくさん論文を書いておりますので、そういう中からいくつかを拾ってご説明いたします。

情報社会と知識社会の移動ということ、まず考えなければなりません。端的に申しますと、20世紀前半の知識社会と、それから20世紀後半から今に至る、いわゆる情報社会と言われていたものにおいて、知識のレベルにおいては変

わりがないといっているのです。もちろん、科学が進歩して、それぞれ新しい学問的用法ができていますから、変わりあることはあるのですけれども、何というんでしょうか、科学的知識そのものとしては、質的に違いはないと言っているのです。

それでも、二つはどこに大きな違いがあるかという、その知識がどんなに速く伝達されるか、また、どんなに正確に伝わるかということです。ですから、教育効果が全く違いますし、伝達効果も全く違う。一番簡単なことで言えば、20世紀前半にテレビジョンもなかった時代には、私どもは新聞を通じてとか、ラジオを通じて、ニュースを知りましたけれども、それは即刻情景が見えてきたわけではございませんが、テレビジョンができて、今のような状態になったときには、イラクで爆発があったら、その同じ時間に、その爆発の状況と、その中で苦しんでいる人々の姿までも見えてくるという。

つまり、イラクでこういう爆撃があつて何人か死んだとかというのは、前にも24時間後ならば知れたでしょう。けれども今は、同時に知られる。しかも、それはその機械を持っている人に全般に知られる、というところで、情報の質において、情報社会と知識社会は完全に違うものだということを、私どもは認めなければなりません。知識社会で新しい道德と言われたもの以上に、情報社会では新しい徳目、新しい道德が期待されるし、つくっていかねばならない。

そして、そういう責任が、その社会の中で生きている人、それを使っている人、それを享受している人、私はただ一方的に享受するだけですけれども、責任を分担しなければなりません。要するに、発信するものも享受するものも、利益を受けるものも、ひとしなみに情報社会に生きている人は、お互いに考えていかねばならないということです。

それで、その時に、情報はまず情報として価値論的に等価であるかどうかという、この問題は非常に大事な問題で、情報を送るものが、あるいは情報を整理するものが、情報をすべて価

値論的に等価であると考えれば、まだその情報を受け取ってはならない児童までが、同じように受け取り、心に傷を残すこととなります。

一番わかりやすいことは、5~6歳とか、12~13歳の子どもに、おとなの見る情報をそのまま与えていいかどうかという問題であります。日本では、テレビジョンにドアを付けて、鍵っ子が勝手にテレビジョンを見られないような仕組み、そういうことまで考えられておりません。フランスや、イギリスや、ドイツ、アメリカなど、家庭教育のうるさいところでは、テレビジョンにそういう扉や幕がついております。何と言ってよいかわかりませんが、こう下ろすと、木の幕のようなものが下りてきて、鍵を持たない幼児及び児童は勝手にとそれが見られないようになっています。

そういうふうにして、伏せるようなことも含めて、情報は情報として、アクシオロジカル (axiological) に、等価であるか否かということは情報を伝達するものとして、いつも考えていかなければならないし、家族の中でもいろいろ考えなければならぬことがあるかと思えます。

それで、そのことは、3のs)をご覧くださいと、「教育と情報」というところがありまして、プラトンの言っていることは大切です。「乳母が寝物語に子ども達に語る神話は、ホメロスのとおりにはならない。なぜかという、ホメロスという大詩人は、多神教の叙事詩を作り、そこでは神々が姦淫をしたり、嘘をついたり、大酒を飲んだり、いろいろ悪いことをします。そこは、乳母が寝物語に幼児に語るときには、どんなに立派な詩人のものであっても削除しなければならぬところがたくさんある。ただし、成長した人間は、削除なしに作品を読まなければならない。」と、その著『国家論』に書いております。ですから、そういう古典学者の言ったようなことも、今の情報に関しては、倫理問題として考えておかなければならないこととなります。

それと同じように、漏らしてはならないことは、先ほど北城会長のお話にもございましたけ

れども、個人情報の守秘ということですが、それが職業ごとによって違うと思いますので、情報システムを考える人々は、自分の仕事がそういうことに関わるのだという意識を持って、どこまで情報は公開されていいのか、守秘されるべき問題かということを考えてはなりません。

これの一つの有名な例は、古典的な例としては、「カトリックの司祭は、犯人が神への許しを求めるとして、司祭に告解した内容は、殺人であっても、自分は神の代理人として聞いたので、その人からの告解は警察がどんなに聞いても漏らしてはならない」ということがあります。それは、それは命がけの守秘ということでございます。ですから、それほど昔から、個人情報ということに関しては、守秘があったのです。ただし、そのことを悪用する人がいる場合どうしたらよいか、このことも議論の対象にすべきでしょう。

今日の個人情報の守秘というのは、まだ、本当に知られたら命に関わるというほどのことではないことも入っておりますが、個人情報の守秘、個人情報の部類分けというようなことも、情報システムとしてはどう考えられるかということもしなければなりません。

それと同時に、昔の物語のすべての不思議なこと。例えば、「空飛ぶじゅうたん」は、飛行機によって実現された。それから、「遠めがね」というものは、テレビジョンで見られるようになってきた、というのです。「隠れ蓑」だけは絶対に機械ではできなかったのです。それがインターネットです。今のEメールのようなもので、あれは架空の住所ですから、情報的な住所ですから、そうしますと、ある程度隠れ蓑になりますから、そういう隠れ蓑を使って悪事を働く人がたくさん出てきておりますので、そういう場合の対策はどういうふうにならなければならないかということ、これは、それを暴くような機械の開発を含めて。犯罪と善行ということの区別を、つまり、情報の活用のしかたということについて、本当に倫理の問題を、情報システムに関係している人々の間で案をつくっていかねばならないことはたくさんあるだろうと思います。

そして、もう一つ、日常的に、これはもっと大きな問題がありますけれども、日常的にわかりやすい例で申しますと、情報機器というのが一般化してからは、倫理が、空間倫理から時間倫理に変わってきている面がある。そして、その時間倫理ということは、ほとんど意識されていないという問題を申し上げます。これは、それを応用してご自分の仕事の中でいろいろ考えていただきたいと思います。

たぶん北城会長がお忘れになったのではないかと思うのですが、ここに立派な懐中時計がございます。私がこれをポケットに入れる。そうしますと、ある空間の中にあるもの、そして、空間的な事物を、もとの空間から私の空間に移すというこの行為が犯罪になりますが、この限りでは、時間的なことはあまり考えられておりませんでした。

ところが最近、いろいろ熱心な営業の人が電話という情報機器を使って、「お初にお電話いたします。ご主人様でいらっしゃいますか」と丁寧な言葉で、小豆の相場がどうのこうのと言いつつ出す。その際、ちょうど私が「情報と倫理」について原稿を書いている最中に、そのようなことに妨げられて仕事ができなくなることもあります。先方は、まじめに営業活動を行っているつもりででしょうが、こちらにとっては、大変な迷惑になります。

ですから、職業で熱心であるという美德であっても、情報機器をむやみに使うことは、ある人の時間の中に許可なしに侵入することになる。そして、物なら失っても、盗まれても、代わりのもので買い直すことができますけれども、このような電話は私の一生の一部である時間を、結局盗るのです。ですから、殺人未遂に近いといっているのです。殺人未遂罪ですか。とにかく、人の時間の中に黙って入ってくるということが、今は許されているのです。これは、倫理では許されない、というふうにならなければなりません。

ですから、熱心な企業があっても、その営業活動の中で、どういうことをしてはいけないか、してもいいか、ということを実面目に考えなけ

ればなりません。これが本当にたくさんになりますと、真面目な電話も拒否しようということになりますし、家族の中で誰かが急病の場合、私はとんで帰らなければならないのだということで、電話をオープンにしておけば、小豆の相場やいろいろなものが入ってくる。そのたびに、「違います、違います」と言っているうちに、腹が立って、何を抗議しようとしているのか忘れてしまうということがございます。

こういうことは日常的な問題でございますけれども、時間倫理は、ただちに、音がしばしばその人の時間を乱しますので、音の倫理に関係してきます。今まで、少しずついろいろな倫理に関わってきましたけれども、音の倫理とか、時間の倫理はまだ完成していませんが、こういう新しい倫理というものこそ、情報システムで考えておられたり、はかられておられたりする方が、新しいいろいろな事例をお出しになり、問題提起をして下さるところではないかと思われれます。

こういうふうに出てきましたときに、情報機器が進歩してきたということは非常にいいことがあって、例えば、携帯電話がございまして、この間もありましたけれども、雪山で遭難していた人が携帯電話をかけて救われたということがございますから、仮に、自分がそういうことが不用意だったとしても、不用意としてとがめられることがあったとしても、町で誰かが倒れていて出血しているようなことがあった時に、もし私どもが携帯電話を持って、「何丁目の何番地のところへ出血して倒れている人がいる」ということを110番にかけてあげれば、その人を救うことにもなりますから、情報システムが完備していくことは、人間の幸福に、特にいろいろな情報の発信という面から、閉ざされていた大衆にいろいろな情報発信の機会を与えるという意味で、非常にいいこともあるのです。

ですから、いいこともあるが、我々が忘れていた悪いこともあるということを考えなければなりません。それがどういうことかという、すべての、私どもの情報社会の世界で、情報と言われているものは、その情報の内容の存在を矮小化しているということがございます。矮小

化している。

それで、皆さん、自問していただきたいのですが、年が明けまして、2005年になりましてから今までの4ヶ月近くの間で、「崇高」という言葉をお使いになったことがございますか。本当に、私はこれが不思議なことだと思います。私は、もう老齢ですので、大学院の授業しか持っておりません。大学院の授業の学生は非常に少ないのですが、私の授業は例外的に20何人出ております。その20何人に、一人一人に聞くことができました、20何人いて、「崇高」という言葉を、この4ヶ月に使った人は一人しかいない。読んだ人は一人しかいない。

ということは、たぶんです、これは情報社会において、情報として発信されてきたり、情報として発信するものは、記号化されていたり、写真化されていたり、何か小さくなっている。富士山が見えても、「美しい」とは言えるのですが、誰も写真の中の富士山を見て、「崇高」とはなかなか言えない。ですから、もしかすると、世界中で「崇高」という概念は忘れられているかもしれない。少なくとも、日本の、私が生きている社会では、「崇高」という言葉は使われておりません。

ということは何かという、人間の生活の中で最も大事な価値の一つは、私は「崇高」だと思います。その「崇高」が忘れられつつある。それは、決して、それが情報社会のせいだというのではなくて、人々のせいなのですね。人々をそういうふうにさせているものとして、我々の知識社会や、我々の情報社会というものがあるのではないか。ですから、本当の意味の偉大なるものに対する賛美という考えは忘れられていて、学問さえ忘れられている。ただ、好奇心があればいい。そして、ノーベル賞などをおもらいになった学者達までが、「好奇心が大事だ、好奇心が大事だ」と言う。好奇心というのは、本当は、昔の学者達は、大事なものとはしていません。好奇心の対象というものは、どんなことでもいいのです。

例えば、変な例をとりますけど、ここに水を入れて、そっちに投げてみたら、どこまでかかるだろうかと。好奇心の対象にはなります。皆

様には迷惑ですが、ちょっとやってみて、「私は好奇心があったので」と言ったって構わないわけなので。それと同じように、人をどのぐらい殴ったら死ぬかということも好奇心になりますしね。人をどのぐらいの高さから落としたりしたら死ぬかということも、好奇心の対象になる。

好奇心ではなくて、やはり学問というのは、「偉大なることへの憧れ」ということです。憧れと欲望とが同一視されるような世界になりました。憧れというのは、やはり欲望と違うのですね。憧れが欲望に変わることはありますけれども、憧れと欲望は違うのです。賛美と好奇心とは違うということです。

こういうことを考えますと、やはりわれわれは、情報システムの中で何がどんどん進歩しているのか、何が少し衰えているのかということも考えながら、人間が今まで大事にしてきたものを大事にすると同時に、今まで人間が見つけていなかった大衆の幸せ、つまり機械化することとは大衆化されるということですから。そして、王様しか知らなかったようなニュースを、支配者しか知らなかったようなニュースを我々みんなが知られるようになったということは、この3のy)に書いてありますが、ギュイヨー(Jéan-Marie Guyau)という人が、「大いなる民衆よ、汝の力によってこそ戦争はなくなるだろう」と言っています。実際になくなるかどうかわかりませんが、戦争の犠牲になったり、戦争の力になるのはいつも大衆なのです。その大衆に、「大いなる民衆よ、汝の力によってこそ戦争はなくなるだろう」と言うのですから、情報システム、情報社会が堅実に行かんとしていくことは本当にいいことなのですが、同時に、それは、いい目的に向かってということで、新しい目的を考える姿勢を人間はもたなければならないのではないかと思います。

あと2分だけお許し願います。科学技術というものがさかんになりますと、世界が変わります。どう変わったかという、技術が道具であるという性格をもちながら、環境になっている。これは大事なことで、こうなったのは1980年ぐらいからじゃないかと思います。そして、そ

ういう新しい技術、連関の世界というのは、道具が随所に入ることですから、人間はその道具を使えばほぼ万能になり、多くの欲望が満たされる。そして、その限られた欲望の充足によって幸せが来ると思うようになってしまっているのですが、決してそうではない。本当の幸せは欲望の達成の充足感とは違う。何か本当に正しく生きているという心の充足感である。本当に他者のために自らの力を捧げることの充足感がなければ心は空しいのです。

ちょうど北城会長も、「サービスということが大事なのです」とおっしゃいましたが、サービスとは、他者への奉仕です。日本では、サービスの本義はあまり知られていません。官吏は、パブリックサーバントなのです、公の奉仕者です。日本語で官吏というと、奉仕などするものかと言わんばかりの、官僚というエリート支配者の態度です。本当に、日本人全体が、サービスという考え方は他者に対する礼儀だということをおぼえているのではないかと思います。社会とは、もともと相互サービスの場なのです。これからの情報システムの考えの中で、他者へのサービス、他者への献身、身をささげてつくすようなこと。それこそが「仁」「愛」だと思います。孔子のいう「仁」が大切です。いかに情報機器を介しての見えざる世間とはいえ、見えざる相手としての人がいることを忘れては「仁」という徳は成り立ちません。情報は隠れ蓑の無責任のことではなく、仁を標榜する人間の責任ある知的奉仕なのです。

そして、ここに「里仁為美」(論語「里仁」篇)について、一番おしまいですが、あと2分いただいで、お話いたします。これは、「仁におるを美となす」と読みますが、里とは里にすみついているという意味です。「仁におれば美をなす」のだから、本当に他者を大事にする精神、愛の精神に棲みついているならば、「美」という価値は輝きだします。美という漢字は、羊が大きいと書きます。羊は中国では犠牲の獣です。犠牲の大きいサービスができるときに、本当の美、すなわち崇高で立派なことができるという意味です。私も人間はみな完全には遠く及ばない、至らない存在ですが、お互いに至らないものでは

あっても、しかし、できるだけ自分達の仕事を通じて他者のためになるような奉仕をしたい。そのためには、「仁におるを美となす」こそ、サービス精神のもととなるものだと思いますし、それよりも隣人愛とか慈悲とか、昔の人々が教えていたようなことにも通じるものではないか。これこそ、『論語』第一の言葉だと思います。

そして、それだけではだめで、具体的に、この新しい社会の中で、どういうことが、自分達の仕事を通じて、徳目として人々に訴えていくことができるか。人々にも守ってもらうことができるかというようなことを考えていただきたいと思います。

私は、先ほどの北城会長のお話からいろいろ学んで、そこに目標達成へのさまざまな問題、社会というところに綱領とか規範や倫理を遵守することが大事だと言われており、その通りなのですが、倫理は、遵守するばかりではなくて、お互いに創造していかなくてはならない。それから、eco の四つの成素、地球も神も人間も社会も、どこにおいても、倫理を創出していく意気込みを心にしっかり持たなければなりません。なぜなら、リスボンシビリティー、責任という言葉は、中世にもなかった。古代にもなかったのです。リスボンシビリティーというのは、18世紀の後半にできた言葉です。誰がつくったのか、いまだにわかりません。しかし、18世紀の市民みな、契約社会の中で何を大事にしなくてはならないかと考えたときに、今までの命令とは違って、相互の契約の中で何が大事かと論じるうちにできてきた言葉です。

そして、「忠」という言葉一つにしても、誰が変えていったのか分かりませんが、「忠」といったら、昔の日本では、天皇陛下が国家と

か主君に対する徳として言っていたのですけれども、自己に忠実とか、友人に忠実とか、仕事に忠実というふうには、「忠」という字も変わっていきました。それは、新しい倫理的な創造だと思います。創造というのは、クリエイションです。もっとも、忠は『論語』では、上の人ばかりではなく、同僚にも目下にもおよそ他者に対して真心を尽くすということでした。

どうぞ、素晴らしい学会がおできになりましたので、私のつたない話でございますが、倫理というものが、「魂の世話」だとソクラテースが定義した哲学という学問が大事であるということだけ、お忘れにならないようにしていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございます。

講演者略歴

1922年東京生まれ。1948年に東京大学文学部哲学科を卒業、同大学院卒業後、1962年に東京大学文学部教授に就任。81年に定年退官。現在は、東京大学名誉教授、英知大学大学院人文科学研究科長。1981年に哲学美学比較研究国際センターを創設し、所長を務め、現在に至る。その間、1996年～99年にパリ哲学国際研究所所長、さらに国際形而上学会会長、国際美学学会会長を経て終身会員、国際エコエティカ学会会長を務めている。主著は、「*Betrachtungen über das Eine*」「同一性の自己塑性」「美の位相と芸術」「愛について」「東西の哲学」「現代の思想」「西洋哲学史」「エコエティカ」「知の光を求めて」など。その他、最近に美学芸術学の「美と存立と生成」及び形而上学の「超越の指標」という大著が相次いで公刊される